

なかつたならば、彼は必らず一時の亂を戡定して更に支那に向つて計畫する處あつたに違ない、それは支那との關係が前述べた様な次第になつて居るのと、また彼が此の情報を受けとつて始めて滯營をすゝめてヂェオルディアに入つたことゝを思ひ合せても想像し得らるゝことゝ思ふ、次ぎ次ぎに齎らす通報によつて、支那が西に向つて勢を加ふる餘地のないことは此の際彼の明らかに見抜いたことであつたらふが、それにしても明室のかゝる内亂に苦しむで居る際に、もしも中亞の軍がその西境を衝き、また當然其の勢力に合すべき筈の韃靼の兵が、同時に南下するといふ様なことが實現せられたならば、明の末路は或は煤山の悲劇を待たなかつたかとも思はれる、此の際西方亞細亞のことは、彼にとつては重大なことであつたには相違ないが、自分は此の時の史跡を辿るたびに、彼が思ひ切つて東向しなかつたことが反すゝも口惜しい様な氣持ちがする。

かくて帖木兒が前表の如く此の後の四五年を西方經略にすごす間に、明では建文元年以來の内亂が四年になつて、南京の陥落となり、六月燕王即位して新たに永樂の治が開かれ、こゝに東西に別れて不世出の英雄が對立することになつたのである。

既に喧傳せらるゝ通りの永樂の盛世であるからして、洪武以來始末のつかない西域問題を黙過する譯はない、明史などによると、早くもその「踐祚するや撒馬兒罕に使を出して勅して其の國を諭し」て居る、此の使が帖木兒に會したのは彼が西征より歸つた年即ち一四〇四年のことで、月は九月、まさに明の永樂二年八月、即ち踐祚の翌年に當つて居る、さて此の勅なるものは如何様なことを諭したのか、また帖木兒は如何なる態度を以て之に應じた